



大貫 隆 [著] 東京大学名誉教授 古代キリスト教思想史

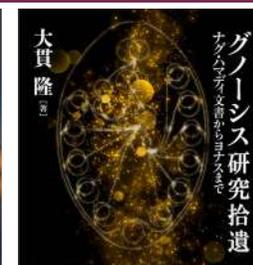
原始キリスト教の「贖罪信仰」の起源と変容

好評 既刊



復活前と現在の「地平」が「融合」する
ヨハネ福音書の重要構造を解明！
ブルトマン・ゲーマー・ボルトマン……「神」なる存在の神学から来る
新約で定説と見なされてきたものから、イエスの生涯の「神」の神学
に即して見直しを要するものまで、その「神」の神学から見た
新約で定説と見なされてきたものから、イエスの生涯の「神」の神学
に即して見直しを要するものまで、その「神」の神学から見た

四六判上製・240頁・定価1,980円
本体1800円＋税
ISBN978-4-909871-72-5 C0016



拾遺——今まで解けなかった謎を解き、集めてゆくこと、
これほど似つかわしい言葉があろうか。
グノーシス主義の神学は新約聖書研究にとって不可分、不可分の神学
である。その神学から日本のグノーシス研究を再考して来た本書が、
グノーシス研究の神学から見た「神」の神学から見たグノーシス研究の
神学から見たグノーシス研究の神学から見たグノーシス研究の神学から見た

四六判上製・368頁・定価2,750円
本体2500円＋税
ISBN978-4-909871-88-6 C0016

8月25日刊行予定

贖罪信仰そのものが、いまだ議論と
再検証の卓上に置かれている！

イエスは人類の罪を贖うため身代わりとなって神に裁かれ十字架で死なれた—この“贖罪”を「キリスト教信仰の要諦」とする考えは、何を、何処を起源とし、いかなるプロセスを経て変容・発展・定着してきたのか——。神概念と共に、今なお謎に満ち、議論の渦中にある贖罪信仰の核心に迫り、キリスト教の再構築を静かに促す。



四六判上製・304頁・定価2,200円
本体2,000円＋税 ISBN978-4-909871-94-7 C0016

主な目次

はじめに

I 原始エルサレム教会の成立からペトロの指導権時代

一 イエスの死の必然性の論証／二 「人の子」イエスの再臨待望との関わり／三 イエスの死の救済論的・贖罪論的解釈／四 贖罪信仰の成立と定式化

1 | コリント書一五章3節bの「キリスト」について／2 | コリント書一五章3b—7節はペトロの「文責」

五 贖罪論の広がり

II 主の兄弟・義人ヤコブの指導権時代

一 ヤコブの年譜／二 ヤコブの救済論＝律法の実行による救い

1 ヘゲシッポス『覚え書』／2 エイレナイオス『異端反駁』／3 ヒッポリュトス『全異端反駁』／4 エピファニオス『薬籠』／5 『ペトロの宣教集』／6 まとめ

III 原始教団のエルサレム脱出とその後のユダヤ主義キリスト教の展開

一 原始エルサレム教会のペラへの脱出／二 神殿倒壊予言の二度目の再活性化／三 その後の影響史・ユダヤ主義キリスト教の諸分派

1 ナゾラ派／2 エピオン派／3 エールケサイ派／4 『ペトロの宣教集』から『ペトロの講話集』へ

四 ユダヤ主義キリスト教のまとめ

IV 補論

一 マタイ福音書／二 ヨハネ福音書

1 ヨハネ福音書の成立地＝アグリッパⅡ世の領国のパタネア地方／2 新しい論拠(a)「ヨルダンの向こうのベタニア」(ヨハ28)とは何処のことか／(b) R・リースナー(Riesner)のテーゼ＝パタネア地方のこと

3 洗礼者ヨハネの弟子団との競合・沐浴運動との接点／4 伝承史の系譜／5 まとめ

三 マンダ教団

1 マンダ教徒とその聖文書／2 「ナザレ人イエス」と「ナゾラ人イエス」／3 エルサレム脱出以後のユダヤ主義キリスト教との関係／(a) ナゾラ派／(b) エピオン派／(c) エールケサイ派／(d) 『ペトロの宣教集』／4 まとめ／5 コーランの中の「サバ人」——結びにかえて

V 結び：贖罪信仰の起源と変容

VI 「贖罪信仰」をめぐる現代の議論によせて

一 「罪の贖い」と「苦難の贖い」の区別／二 「罪」の定義の変容／三 「贖罪信仰」の教理化が孕む問題／四 現実性全体の根源への問い／五 補論 神も途上に・再考

【追記】

あとがき／引照箇所索引／研究者名索引／参考文献

著者紹介 大貫 隆(おおぬき・たかし) 1945年静岡県浜松市生まれ。1968年一橋大学卒業、1972年東京大学大学院人文科学研究科西洋古典学専攻修士課程修了、1979年ミュンヘン大学神学部修了・神学博士、1980年東京大学大学院博士課程(前記)単位取得退学、東京女子大学専任講師、1991年東京大学教養学部助教授、2009年同名誉教授、自由学園最高学部長(—2014年)。主な著作：『世の光イエス——ヨハネ福音書のイエス・キリスト』(1984年、改訂増補版、1996年)、『福音書と伝記文学』(1996年)、『ロゴスとソフィア——ヨハネ福音書からグノーシスと初期教父への道』(2001年)、『聖書の読み方』(2010年)、『終末論の系譜——初期ユダヤ教からグノーシスまで』(2019年)、『イエスの「神の国」のイメージ——ユダヤ主義キリスト教への影響史』(2021年)、『ヨハネ福音書解釈の根本問題——ブルトマン学派とゲダマーを読む』(2022年)、『グノーシス研究拾遺——ナグ・ハマディ文書からヨナスまで』(2023年)著訳書多数。